

一本の銀の針

小川未明

青空文庫

兄と妹は、あにいもうと海岸の砂原の上で、いつも仲よく遊んでいました。

おじいさんは、このあたりでは、だれ一人、「海の王さま」といえば、知らぬものはないほど、船乗りの名人でありました。ほとんど一生を海の上で暮らして、おもしろいこと、つらいことのかずかずを身に味わってききましたが、いつしか年を取って、船乗りをやめてしまいました。

おじいさんに、一人のせがれがありました。やはり、おじいさ

んと同じように船乗りでした。ある日のこと、家にと、女房と二人の子供を残して、沖の方へと出かけてゆきましました。

おり悪しく、その晩に、ひどいあらしが吹いて、海の中は、さながら渦巻きかえるように見られたのでした。家族のものは心配しました。そして、どうか無事に帰ってくれるようにと待つ

ていましたけれど、ついに、海へ出ていったせがれは、それぎり帰ってきませんでした。おじいさんは、あのあらしのために、破船して死んでしまったのだらうと思いましたが、女房や、孫たちが、悲しむのをたまらなく思つて、

「どこかへ避難しているかもしれない。もう二、三日待ってみよ

う。「といいました。

人間にんげんというものは、どんな不幸ふこうに出であつても、日数ひかずのたつう

ちには、だんだん忘れてしまふものであつたからです。

二日ふつかたつても、三日みっかたつても、せがれの乗のつた船ふねはもどつてき

ませんでした。ある日ひのこと、その船ふねの破片はへんが波なみに打ち寄よせられ

て、浜辺はまべに上あがりました。それを見みたときに、どんなにおじいさ

んは、悲かなしんだであります。せがれの女にようぼう房ぼうはあまりの悲かな

しみから、ついついに病氣びょうきとなり、それがもととなつて死しんでしま

いました。

二人ふたりの子供こどもは、父ちちを失うしない、母ははに別わかれて、そのときから、おじい

さんに育そだてられたのであります。海うみの上うへを吹ふいてくる風かぜが、コト

コトと窓の戸をたたたく音を聞くと、おじいさんは、それでもせがれが生きていて帰つてきたのではないかと耳を傾けました。また、夜中に、波の音が、すすり泣くように、かすかに耳にひびくと、おじいさんは、せがれの女房のことを思い出しました。それにつけてもおじいさんは、二人の孫たちをかわいがつたのであります。

月日は、いつのまにかたつてしまいました。兄と妹の二人は、仲よく、海岸の砂原で、白に、黄に、いろいろの花をつんだりして遊んでいますうちに、大きくなりました。

二人は、両親がなかつたけれど、おじいさんがかわいがつてくださったので、幸福でありました。

兄あには、だんだん年としを取ると、自分じぶんもどうか船乗りふなのになりたいとおも
 思おもいました。おじいさんは、大事だいじなせがれが海うみで死しんでから、ど
 うしても孫まごを船乗りふなのにさせようとは思おもいませんでした。
 「海うみの王おうさま」と、おじいさんが、みんなからいわれたというこ
 とを聞きくと、兄あには、どうかして自分じぶんも船乗りふなのの名めいじん人になりた
 いものだと思かんがえたのです。

「僕ぼくは、どうしてもおじいさんにお願ねがいして、船乗りふなのにしてもら
 いたい。」と、兄あには、妹いもうとに向むかっていいました。

「兄にいさんが、海うみへいつてしまわれたら、私わたしはどんなに寂さびしいかし
 れない。」と、妹いもうとは、はや涙なみだぐんで答こたえました。

妹いもうと対たいして、やさしかった兄あには、なぐさめるように、

「あの遠い海のあちらには、不思議な島があつて、そこへゆけば、いろいろの珍しいものがあるというから、それをお土産に持つてきてあげよう。」といいました。

妹は、おじいさんから、その不思議な島の話聞いていました。海の中にすんでいる獣の牙や、金色をした鳥の卵や、香水の取れる草や、夜になるといい声を出して、唄をうたう貝などがあるということ聞いていましたから、

「兄さん、私に、金色の鳥の卵と、夜になると唄を歌う貝を、お土産にかならず持つてきてください。」と頼みました。

金色の卵は、鶏にあたたためさして、美しい鳥にかえさせようと思つたからです。

「じや、わす忘れずに持もつてきてあげるから、おまえもおじいさんに、僕ぼくの望のぞみをかなえてもらおうように頼たのんでおくれ。」と、兄あにはいいました。

いもうと妹は、承しょうち知して、兄あにがおじいさんに頼たのんだときに、自じぶん分もいっしょになつて願ねがつたのであります。

おじいさんは、すぐにはうんとはいいませんでした。

「おじいさんを、みんなが海うみの王おうさまと聞いていたということきを聞ききました。どうか、僕ぼくを、第だい二の海うみの王おうさまにさしてください。
。」と、兄あにはいいました。

「おまえが、その決けつ心しんをしてくれるのはうれしいが、またあらしにあつて船ふねがこわれたら、とりかえしのつかないことになつて

しまう。」と、おじいさんは、思案しあんをしました。しかし、ついに、孫まごたちのいうことを許ゆるしてやりました。

二

おじいさんは、孫まごがいよいよ船出ふなでをするというので、夜よるもおそくまで起おきでいて、船ふねに張はる帆ほを縫ぬっていました。どんな強つよい風かぜに当あたつても裂さけぬように、またどんなに雨あめや波なみにぬらされても、破やぶれぬようにと、念ねんに念ねんをいれて造つくっていました。

妹いもうとは、兄にいさんといつしよになつて、船出ふなでの許ゆるしをおじいさんに頼たのんだものの、兄あにの身みの上うえが案あんじられてしかたがありませんでし

た。

「どうかして、兄にいさんが無事ぶじに、出でていつて帰かえつてこられるように。」と、祈いのつたのであります。

その日ひも、妹いもうとは、兄あにのことを心しん配ぱいしながら道みちを歩あるいてくると、さびしいところに小川おがわが流ながれていて、そこに、狭せまい橋はしがかかつており、一人ひとりのおばあさんが、その橋はしを渡わたることができずにこまっ
ていました。

だれも、人ひとが通とおらなかつたので、だいぶ長ながい間あいだここに、こうし
ておばあさんは立たつているものと思おもわれたのであります。

妹いもうとは、そのおばあさんを見みると気きの毒どくになりました。自分じぶんがど
うかして手てでも引ひいて渡わたらせてあげようと、そばへいつてみます

と、おばあさんは盲目めくらでありました。

妹いもうとは、びつくりしました。こんな盲目めくらがどうして、このあたりまで一人ひとりでやってこられたろうかと思われしました。

「どんなにか、おばあさん、お困りこまでしたでしょう。私わたしが手てを引ひいてあげます。」と、妹いもうとはいいました。

すると、盲目めくらのおばあさんは、

「どうかおぶつて、渡わたしておくれ。」と、それがあたりまえであるというような調子ちようしで答こたえたのです。

妹いもうとは、ずいぶん横おうちやく着くなおばあさんだと心こころに思おもいました。また自分じぶんがおぶつては、あぶなくて渡わたられないからでした。

「お手てを引ひいてあげましょう。」

「いいえ、おぶつてもらいましょう。」と、おばあさんは、頭を振つていいました。

妹はしかたなく、苦心をして、そのおばあさんをおぶつて、ようよう橋を渡ることができました。すると、盲目のおばあさんは、もう白くなつた髪の毛を探つて、その中から一本の銀の針を取り出しました。

「この針は、不思議な、どんな願いごとかなう針だから、これをおまえさんにお礼としてあげる。けつして、みだりに他人にやったり、見せたりしてはならぬ。」といつて、おばあさんは銀の針を妹にくれました。

妹は、喜んで家に帰りました。そして、その晩に、おじいさん

が帆ほを縫ぬうてつだいをして、おばあさんからもらった銀ぎんの針はりで、
 どうか兄にいさんが無ぶ事じに帰かえつてきてくださるようにと祈いのりながら縫ぬ
 いました。細ほそい銀ぎんの針はりでは、厚あつい布きれがよく通とおりそうもないのに、
 よく通とおりました。不ふ思し議ぎな針はりだから、きつとおじいさんの造つくつて
 くださった帆ほは、けつして、風かぜにも、雨あめにも、破やぶれないであろう
 と思おもいました。

三

真まつ白しろな帆ほが、でき上あがって、それが船ふねに張はられたのです。そ
 して、ある朝あさ、若わか者ものは、妹いもうとや、おじいさんに見み送おくられて、この

海岸から沖をさして船出したのであります。

だんだん沖へ、沖へ出ると、そこはものすごい景色でありました。白い波は、いままで自分たちばかりの遊び狂うところだと思つていたのに、真つ白な帆をかけた船が、中へ割り込んできたものだから、びっくりしました。

「この世界は、おれたちの世界だ。それなのに、おれたちよりもつと白い大きなものが、頭の上を平気で踏んでゆくとはけしからん。」といつて、波は騒ぎたてました。

いくら波が騒いでも、昔、海の王さまといわれた、おじいさんの孫の乗っている船は平気でありました。波の上を越して、もつと沖へ、沖へとこいでゆきました。

「あちらの島しまに着ついて、金色きんいろの卵たまご、夜よるになるとおもしろい唄うたをうたう貝かいを拾ひろつてきて、妹いもうとへの土産みやげにしよう。自分じぶんがこの航海こうかいを無事ぶじに終おえたら、もうりっぱな船乗ふなのりだ。いつか、海うみの王おうさまの後継あとつぎだという評判ひょうばんがたつであらう。」と、若者わかものは、そう思おもわずにいられなかつたのです。

波なみは、いくら騒さわいでも、どうすることもできませんでした。そのとき、空そらを風かぜが通とおりかかつた。波なみは、日ひごろはあまり仲なかはよくなかつたけれど、こんなときは味方みかたになつてもらおうと思おもいました。たから、風かぜを呼よび止とめて、

「あんな小ちいさい船ふねのぶんざいで、私わたしたちの世界せかいをかつてに乗りまわすなんて生意氣なまいきじゃありませんか。沈しずめてしまおうと思おもうんで

すが、わたし私たちの力ちからばかりではだめですから、ひとつ助たすけてください。
い。」と頼たのみました。

風かぜは、そういつて頼たのまれると、いやだとはいえなかった。それに、自分じぶんがひとあばれしてみたいと思おもっていたやさきでありましたから、

「よろしい、大おおいにあばれてみましょう！」と、ただちに受うけ合あうと、もう、高たかく怒いかり声こえをたて、白しろい帆ほを張はつた小船こぶねに向むかってぶつかりました。小船こぶねは、木この葉はのように波なみの上うへでほんろうされていきました。

若わかもの者は、おじいさんもかつて、こうしためにあって、それに戦たたかつてきたことを思おもいました。またお父とうさんは、やはりこんなめ

にあつて、船がこわれて沈んでしまつたのであろうと考えました。彼は、いまこそ自分の力を試すときだと思つて、力いっぱい風と波とに戦つたのであります。

しかし、風の助けを得て、波はますます高くなりました。そして、白い帆の上を越すようになりました。

若者は、せつかくここまでできながら、望みの島に着くこともできず、空しく海底のもくずになつてしまふのかと残念がりました。また岩の上に降りていたたくさんの白い鳥は、波に足場をさらわれてしまつて、あらしの叫ぶ空の中で、しきりに悲しんで鳴いていました。そのうちに、日が暮れてしまつた。

夜になつても、風は、静まりませんでした。波は、はやく船を

沈めてしまわなければならぬと、四方から打ち寄せてきました。
 若者は、おじいさんのことを思い、また妹のことを思い出しました。

おじいさんの造つてくださった帆は、この風にも裂けませんで
 した。若者は、どこへなりと風の吹く方向へ押し流されてゆ
 こうと、運命に身を委せてしまったのです。

あたかも、暗い雲を破つて月が照らしました。月は、海の上を
 くまなく、ほんのりと明るくしました。そのとき、白い帆の端で、
 異様な輝きを放つたものがあります。船の中で頭を抱えていた若
 者には、それがわからなかつたけれど、目ざとい風はすぐにそ
 れを見つけました。妹が、兄さんの無事を祈るために、盲目のお

ばあさんからもらった銀の針を、だれも気のつかないところに刺しておいた、それに月が映つたのであります。

風は、その光を見てびっくりしました。その光の中に、あの怖

ろしい盲目のおばあさんが、じっとしてすわっていたからでした。

盲目で、白髪のおばあさんは、北極の氷の上にいるおば

あさんです。波でも、風でも、おばあさんの住んでいる国へいつ

たものは、おばあさんの機嫌しだいで、すぐにも息の音を止めら

れたり、また凍らせられたりするのです。

あらしは、おばあさんを見ると、ぴたりとやんで、こそこそと

どこへか逃げてゆきました。波もまた静かになつてしまいました。

こうして、若者は無事に島を探検して帰ると、はたして、み

んなから、第二^{だい}の海^{うみ}の王^{おう}さまと呼ば^よばれたのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

初出：「少年倶楽部」

1927（昭和2）年2月

※表題は底本では、「一一本《ぼん》の銀《ぎん》の針《はり》」
となっております。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年2月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一本の銀の針

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>